

保育における唱歌・童謡の現状と課題： 保育者 ・保護者および保育学生を対象とした質問紙調査を もとに

著者	羽根田 真弓
雑誌名	鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要
号	86
ページ	11-21
発行年	2023-01-16
出版者	鳥取看護大学・鳥取短期大学
ISSN	2189-8332
URL	http://doi.org/10.24793/00000406

〈論文〉

保育における唱歌・童謡の現状と課題
—保育者・保護者および保育学生を対象とした質問紙調査をもとに—

羽根田 真 弓

Mayumi HANEDA : The Current Situations and Issues of the Japanese Children's Songs Genres "Shouka" and
"Douyou" in Childcare —Based on the Analysis of the Questionnaire Survey to Childcare Workers,
Guardians and Childcare Students—

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第86号 抜刷

2023年1月

保育における唱歌・童謡の現状と課題 —保育者・保護者および保育学生を対象とした質問紙調査をもとに—

羽根田 真 弓¹

Mayumi HANEDA : The Current Situations and Issues of the Japanese Children's Songs Genres "Shouka" and "Douyou" in Childcare—Based on the Analysis of the Questionnaire Survey to Childcare Workers, Guardians and Childcare Students—

「唱歌」「童謡」の歴史の変遷を学習した保育学生の「唱歌」「童謡」への継承意思が質問紙調査の結果から明らかに示された。保育者および保護者を対象とした質問紙調査からも同様の意思が認められた。つまり、「唱歌」「童謡」の継承は保育学生および保育現場からその必要性が認識されている。しかし、保育現場において「唱歌」「童謡」として意識的に教材選択がなされているかは不明であり、これらの歌唱教材を継承していくためには、同教材の意義や文化所産であることの見識を深める必要がある。

キーワード：唱歌 童謡 保育 歌唱教材 継承

1. 問題の所在と研究目的

本研究の背景には、保育者養成課程の音楽科目担当者として、保育学生に対する「唱歌」「童謡」についての意識啓発が課題としてある。

太田他(2018)¹⁾、平澤(2018)²⁾および羽根田(2020)³⁾は、若い世代の保育者の「唱歌」「童謡」の認知度が低下している問題について報告し、このままでは保育現場において「唱歌」「童謡」が時代の変化とともに次世代の子どもたちによって歌い継がれていかないのではないかと危惧している。この危惧は、保育現場における歌唱指導のあり方だけでなく、保育者養成校としての教育課程のあり方とも密接に関わっている。

本学における1年次の保育学生は、保育現場で指導すべきさまざまな歌唱曲に対して歌うこと自体への意欲は示すものの、それらの歴史の変遷に関して

興味・関心が低い実態が見られる。とりわけ「唱歌」「童謡」に対して、保育現場で日常的に歌われる既存の歌もしくは子どもの歌としての認識にとどまり、わが国の歴史の中で文化のおよび音楽の変遷によって誕生した「唱歌」「童謡」としての区別理解が容易ではない学生も多い。

そこで、2021年度より「音楽」科目のシラバスを全面的に改訂した。保育者養成課程における系列「保育の内容・方法」の専門教育科目「音楽1」(1年次前期開講)では、入学時にピアノ学習経験がない学生の割合が多いため、読譜力習得を授業の到達目標として設定し、あわせて保育現場で扱われる歌唱教材のピアノ伴奏演奏技術習得も学習内容として設定した。「音楽2」(1年次後期開講)では、「音楽1」の内容をさらに深めるため歌唱表現の上達を授業の到達目標とするとともに、表1で示したとおり、子どもの歌唱教材の歴史の変遷の習得も学習内容とした^{注1)}。具体的には、明治14年(1881)に発行された『小学唱歌集初編』による黎明期の唱歌、言文一致唱歌、文部省唱歌そして童謡、さらにレコード童

1 鳥取短期大学幼児教育保育学科

謡, 新しい子どもの歌の6項目の独唱と合唱である。

子どもの歌唱教材を具体的な学習内容として設定したことにより, 保育学生たちが「唱歌」「童謡」の意義を理解し, さらにはこれら「唱歌」「童謡」を次世代に引き継いでいかなければならないのだという意識を高めることを目標とした。これらの成果が得られたかどうかを確かめるために1年次に「唱歌」「童謡」の歴史の変遷を学習した保育学生2年生を対象に質問紙調査を実施した。あわせて保育者および保護者を対象として「唱歌」「童謡」についての質問紙調査を実施し, 3者間における意識の相違について検討した。

表1 2021年度「音楽2」シラバス

授業概要	歌唱表現の知識・基礎技能を修得する。子どもの歌唱教材の変遷を理解し, 保育現場での音楽表現活動とその方法を学ぶ。ピアノを含む。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・保育現場で積極的に音楽表現活動ができる基礎力を身につけ, 意欲を持って取り組む。 ・歌唱表現を楽しむことができる。 ・歌唱指導の技術を身につける。 	
授業計画	回数	授業内容
	1	〈保育者の声について〉 人的環境としての声, 保育現場の音環境
	2	〈発声の基礎〉
	3	〈唱歌の誕生：明治初期〉 学制の頒布, 「唱歌」の設置, 『小学唱歌集初編』『幼稚園唱歌集』の発行, 文語体の歌詞, 翻訳唱歌, 伊澤修二
	4	〈言文一致唱歌：明治中期〉 文語体から口語体の歌詞へ, 田村虎蔵, 唱歌集の出版, 昔話唱歌, 滝廉太郎
	5	〈文部省唱歌：明治後期〉 『尋常小学読本唱歌』『尋常小学唱歌』の刊行, 合議制, 高野辰之, 岡野貞一, 文部省唱歌の特徴

授業計画	6	〈童謡：大正時代〉 『赤い鳥』創刊, 鈴木三重吉, 児童雑誌, 北原白秋, 野口雨情, 童謡の衰退
	7	〈レコード童謡：昭和初期〉 音楽の量産化, 童謡のレコード化, 『エホンシャウカ』の出版
	8	〈新しい子どもの歌：昭和中期〉 戦後のラジオから流れる歌, 少女歌手, 「新しい歌」の時代, 「ろばの会」, テレビ放送によって生まれた歌, 音楽環境の拡大
	9	保育現場における歌唱教材について (ディスカッション)
	10	合唱アンサンブル
	11	合唱アンサンブル
	12	独唱 (公開レッスン)
	13	独唱 (公開レッスン)
	14	演奏発表会
	15	演奏発表会

2. 方法

質問紙調査は, 2022年7月から8月にかけて実施した。

(1) 調査対象者

保育学生は, 鳥取短期大学幼児教育保育学科2年生106名に質問紙調査の依頼をし, 任意で61名の学生から回答を得た。

保育者は, 鳥取県内すべての保育所, 幼稚園および認定こども園の保育者を対象とした。鳥取県内の公立保育所72ヶ所, 私立保育所62ヶ所, 公立幼稚園4ヶ所, 私立幼稚園11ヶ所, 公立認定こども園21ヶ所, 私立認定こども園34ヶ所の合計204ヶ所の園長宛てに研究目的を記載した調査依頼文書を郵送し, 各園での保育者の回答数は任意とした。その結果, 266人の保育者から回答を得た。

保護者は, 鳥取県倉吉市内の私立認定こども園2園に調査依頼をし, 205名の園児の保護者に任意で

回答を求め、68人の保護者から回答を得た。

(2) 手続き

調査目的と任意の回答であることを記載した質問紙調査依頼文書を保育学生には授業時間外に配布した。保育者には各園に郵送、保護者には各園から配布していただいた。

回答は無記名とし、質問紙調査依頼文書にQRコードを示してGoogle Formsを用いて回答を収集することとした。そして、「唱歌」および「童謡」についての共通理解が得られるように質問紙調査依頼文書配布と同時に別紙参照として、「唱歌」を「明治期に学校教育を場として教育的意図を持って教材として作られた歌、さらに民間から興った口語体による言文一致唱歌、そして著作権が文部省に帰属している文部省唱歌⁴⁾」として付記し、それぞれ代表的な唱歌の例を示した^{注2)}。また、「童謡」は「大正デモクラシーを背景に、学校唱歌を批判して鈴木三重吉らの児童雑誌『赤い鳥』等の児童雑誌から誕生した子どもの詩歌⁵⁾」と付記して代表的な童謡の例を示した^{注3)}。

なお、本研究は、鳥取短期大学研究倫理審査委員会における承認を得て実施した(承認番号2022-2)。

保育学生を対象とした質問項目は、次のとおりである。

1) 幼少期に唱歌・童謡をどれだけ歌ったかについて、「たくさん歌った」「少し歌った」「まったく歌わなかった」の3項目の中から、1項目を選択する回答を求めた。

2) 唱歌・童謡についてどのようなイメージを持っているか、あらかじめ設定した「なつかしい歌である」「美しいメロディである」「子どものための歌である」「抒情的な雰囲気を持った歌である」「言葉が美しい歌である」「時代に合わない歌である」「子どもたちには難しい歌である」「古めかしい感じがする歌である」「伝統的な歌である」「あまりなじみのない歌である」「その他」の11項目の中から、複数

回答を求めた

3) 将来、保育者として唱歌・童謡を子どもたちに継承することについて、「とても賛成である」「やや賛成である」「どちらとも言えない」「やや反対である」「反対である」「唱歌・童謡についてよくわからない」の6項目の中から、1項目を選択する回答を求めた。

「とても賛成である」「やや賛成である」と回答した場合、その理由としてあらかじめ設定した「唱歌・童謡は、歌唱教材としてふさわしいから」「唱歌・童謡は、児童文化財であるから」「保育現場として唱歌・童謡を継承する意義があるから」「唱歌・童謡には子どもたちに歌ってほしいと思う歌が多くあるから」「唱歌・童謡を次世代の子どもたちに歌い継ぎたいから」「その他」の6項目の中から、複数回答を求めた。一方、「やや反対である」「反対である」と回答した場合、「唱歌・童謡の教材は、今日の子どもたちには内容、背景が異なっているから」「唱歌・童謡は、子どもにとっては難しいから」「今の時代の歌を歌うことが望ましいから」「唱歌・童謡についての教材にはこだわらないから」「子どもの興味・関心のある歌を教材として扱うことが重要であるから」「唱歌・童謡についてよくわからないから」「唱歌・童謡は、歌唱教材としてふさわしいと思わないから」「その他」の8項目の中から、複数回答を求めた。

4) 将来、保育者として保育現場で唱歌・童謡を歌唱教材として用いることについて、「とても賛成である」「やや賛成である」「どちらとも言えない」「やや反対である」「反対である」「唱歌・童謡についてよくわからない」の6項目の中から、1項目を選択する回答を求めた。

保育者を対象とした質問項目は、次のとおりである。

1) 回答者の勤務先形態

2) 回答者の年代

3) 保育者として、唱歌・童謡を積極的に歌唱教材として用いることについて、「とても賛成である」「や

や賛成である」「どちらとも言えない」「やや反対である」「まったく反対である」「唱歌・童謡についてよくわからない」の6項目の中から、1項目を選択する回答を求めた。

4) 唱歌・童謡についてどのようなイメージを持っているか、あらかじめ設定した11項目の中から、複数回答を求めた。11項目は、保育学生および保護者を対象とした設定項目と同様である。

5) 保育者として、保育現場において唱歌・童謡を継承することについて、「とても賛成である」「やや賛成である」「どちらとも言えない」「やや反対である」「まったく反対である」「唱歌・童謡についてよくわからない」の6項目の中から、1項目を選択する回答を求めた。

さらに、「とても賛成である」「やや賛成である」と回答した場合、その理由について、あらかじめ設定した6項目の中から複数回答を求めた。6項目は、保育学生および保護者を対象とした設定項目と同様である。一方、「やや反対である」「反対である」と回答した場合、その理由について、あらかじめ設定した8項目の中から複数回答を求めた。8項目は保育学生および保護者を対象とした設定項目と同様である。

保護者を対象とした質問項目は、次のとおりである。

- 1) 回答者の年代
- 2) 家庭内で唱歌・童謡を子どもと一緒に歌うかどうかについて、「よく歌う」「時々歌う」「あまり歌わない」「まったく歌わない」「唱歌・童謡についてよくわからない」の5項目の中から、1項目を選択する回答を求めた。
- 3) 童謡・唱歌についてどのようなイメージを持っているか、あらかじめ設定した11項目の中から複数回答を求めた。11項目は、保育学生および保育者を対象とした設定項目と同様である。
- 4) 保育現場において、唱歌・童謡を子どもたちに継承することについて、「とても賛成である」「やや賛成である」「どちらとも言えない」「やや反対であ

る」「反対である」「唱歌・童謡についてよくわからない」の6項目の中から、1項目を選択する回答を求めた。

「とても賛成である」「やや賛成である」と回答した場合、その理由としてあらかじめ設定した6項目の中から複数回答を求めた。6項目は保育学生および保育者を対象とした設定項目と同様である。

一方、「やや反対である」「反対である」と回答した場合、その理由としてあらかじめ設定した8項目の中から複数回答を求めた。8項目は保育学生および保育者を対象とした設定項目と同様である。

5) 保育現場において、唱歌・童謡を歌唱教材として用いることについて、「とても賛成である」「やや賛成である」「どちらとも言えない」「やや反対である」「反対である」「唱歌・童謡についてよくわからない」の6項目の中から、1項目の回答を求めた。

3. 結果

(1) 保育学生を対象とした質問紙調査結果

1) 幼少期に唱歌・童謡を歌ったかについて

「たくさん歌った」と回答した割合は67.2% (41人), 「少し歌った」と回答した割合は29.5% (18人), 「まったく歌わなかった」とする回答の割合は3.3% (2人) の割合であった。

2) 唱歌・童謡についてどのようなイメージを持っているか

複数回答で回答を求めた結果を図1で示す。

3) 将来、保育者として唱歌・童謡を子どもたちに継承することについて

「とても賛成である」と回答した割合は67.2% (41人), 「やや賛成である」と回答した割合は32.8% (20人) であった。「やや反対である」「反対である」「唱歌・童謡についてよくわからない」と回答した保育学生はいなかった。

4) 唱歌・童謡を保育現場で継承することに賛成である理由

複数回答で回答を求めた結果を図2で示す。

保育における唱歌・童謡の現状と課題

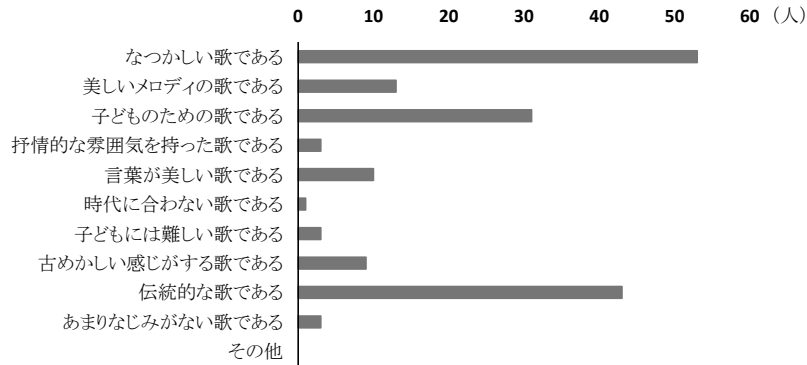


図1 唱歌・童謡に対するイメージ (保育学生)

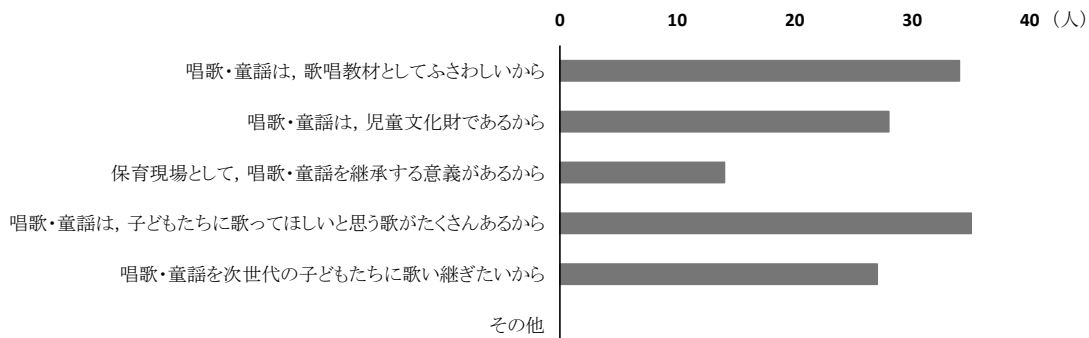


図2 保育現場で継承することに賛成である理由 (保育学生)

5) 将来、保育者として保育現場で唱歌・童謡を歌唱教材として用いることについて

「とても賛成である」と回答した割合は68.9% (42人), 「やや賛成である」と回答した割合は26.2% (16人), 「どちらとも言えない」と回答した割合が8.2% (5人)であった。「やや反対である」「反対である」「唱歌・童謡についてよくわからない」と回答した保育学生はいなかった。

(2) 保育者を対象とした質問紙調査結果

1) 回答者の勤務先形態

保育所(保育所型認定こども園含む)の割合は61.7% (164人), 幼稚園(幼稚園型認定こども園含む)は15.4% (41人), 幼保認定型認定こども園は22.9%(61人)の割合であった。

2) 回答者の年代

20代の割合は27.8%(74人), 30代は18.4% (49人), 40代は29.7% (79人), 50代は17.3% (46人), 60代は6.8% (18人)の割合であった。

3) 保育者として、唱歌・童謡を歌唱教材として積極的に用いることについて

「とても賛成である」の回答の割合は71.5% (191人), 「やや賛成である」の回答の割合は24.4% (65人), 「どちらとも言えない」の回答の割合が3.4% (9人), 「唱歌・童謡についてよくわからない」の回答の割合が0.4% (1人)の割合であった。「やや反対である」「まったく反対である」の回答はなかった。

4) 唱歌・童謡についてどのようなイメージを持っているか

複数回答で回答を求めた結果を図3で示す。

5) 保育者として、保育現場において唱歌・童謡を継承することについて

「とても賛成である」の回答の割合は66.9% (178人), 「やや賛成である」の回答の割合は28.6% (76人), 「どちらとも言えない」の回答の割合は4.5% (12人)の割合であった。「やや反対である」「まったく反対である」の回答はなかった。

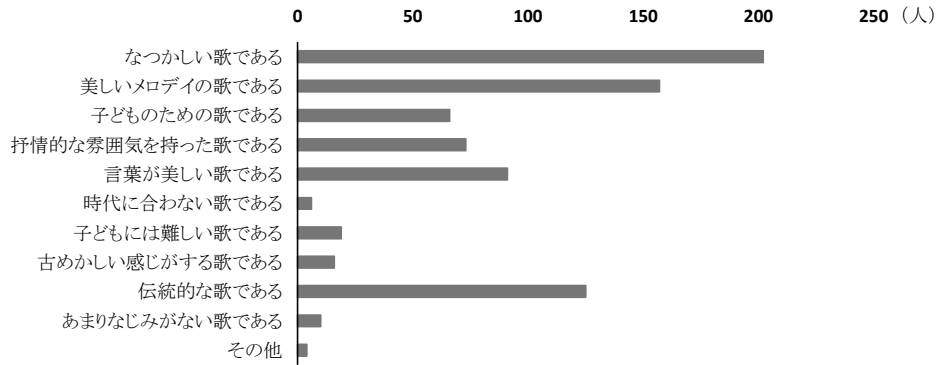


図3 唱歌・童謡に対するイメージ (保育者)

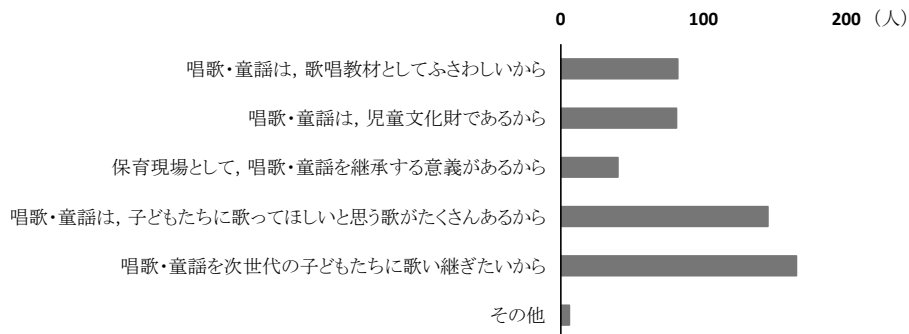


図4 保育現場で継承することに賛成である理由 (保育者)

6) 唱歌・童謡を保育現場で継承することに賛成である理由

複数回答で回答を求めた結果を図4で示す。

(3) 保護者を対象とした質問紙調査結果

1) 回答者の年代

20代の割合は5.9%(4人), 30代は51.5%(35人), 40代は29.4%(20人), 50代は7.4%(5人), 60代は2.9%(2人), 70代と80代がそれぞれ1.5%(1人)の割合であった。

2) 家庭内で唱歌・童謡を子どもと一緒に歌うかについて

「よく歌う」の回答の割合は23.5%(16人), 「時々歌う」の回答の割合は51.5%(35人), 「あまり歌わない」の回答の割合は19.1%(13人), 「まったく歌わない」の回答の割合が5.9%(4人)であった。

3) 唱歌・童謡についてどのようなイメージを持っているか

複数回答で回答を求めた結果を図5で示す。

4) 保育現場において唱歌・童謡を継承することについて

「とても賛成である」の回答の割合は82.4%(56人), 「やや賛成である」の回答の割合は14.7%(10人), 「どちらとも言えない」の回答の割合が2.9%(2人)の割合であった。「やや反対である」「反対である」の回答はなかった。

5) 唱歌・童謡を保育現場で継承することに賛成である理由

複数回答で回答を求めた結果を図6で示す。

6) 保育現場において、唱歌・童謡を歌唱教材として用いることについて

「とても賛成である」の回答の割合は83.8%(57人), 「やや賛成である」の回答の割合は13.2%(9人), 「どちらとも言えない」の回答の割合が2.9%(2人)であった。「やや反対である」「反対である」の回答はなかった。

保育における唱歌・童謡の現状と課題

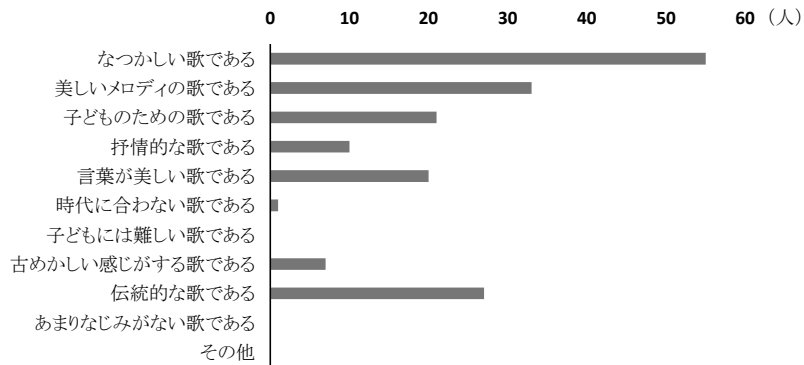


図5 唱歌・童謡に対するイメージ（保護者）

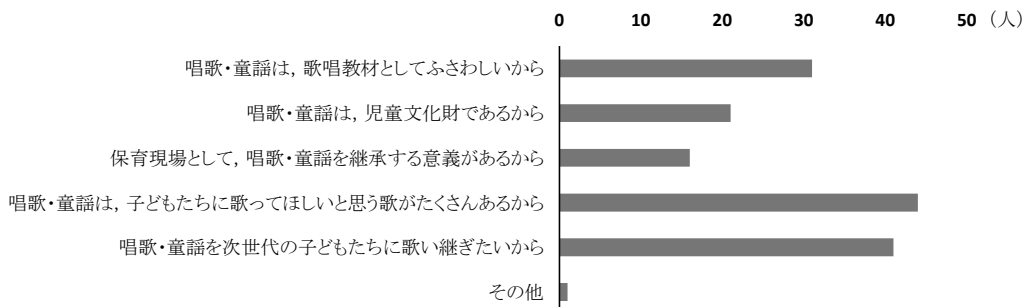


図6 保育現場で継承することに賛成である理由（保護者）

(4) 回答者別のクロス集計結果

1) 唱歌・童謡についてどのようなイメージを持っているか

保育学生および保育者、保護者は「唱歌」「童謡」についてどのようなイメージを持っているか、それぞれの項目回答の割合は図7のとおりである。

図7で示すように、3者とも「なつかしい歌である」という項目を回答した割合が最も高く、 χ^2 検定の結果は3者間による回答比に差はなかった。なかでも保育学生が「なつかしい歌である」と回答している割合が高いことは、注目に値する。

「美しいメロディの歌である」という項目の回答の割合も3者ともに高いが、 χ^2 検定の結果において、3者間の人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2) = 27.689, p < .01$)。保育者および保護者の方が、保育学生よりも「美しいメロディである」とイメージしていた。

「子どものための歌である」の項目においても3者間で人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2) = 16.157, p < .01$)。また、「言葉が美しい歌である」

の項目においても3者間で人数の偏りは有意であり ($\chi^2(2) = 7.164, p < .05$)、「伝統的な歌である」の項目においても3者間で人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2) = 13.944, p < .01$)。

2) 唱歌・童謡を保育現場で継承することに賛成である理由

保育学生および保育者、保護者が継承することに賛成とする理由項目の回答の割合は、図8のとおりである。

「継承することに賛成である」の理由として回答の割合が3者とも高い項目は「唱歌・童謡を次世代の子どもたちに歌い継ぎたいと思うから」である。保育者と保護者の回答の割合が保育学生と比較して高く、 χ^2 検定の結果、3者間の人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2) = 6.533, p < .05$)。次に回答の割合が高い項目は、「唱歌・童謡は子どもたちに歌ってほしいと思う歌があるから」であり、3者間での回答比率の差は認められなかった。

一方、保育学生の回答の割合が保育者および保護者の割合よりも高い結果が得られたのは、「唱歌・

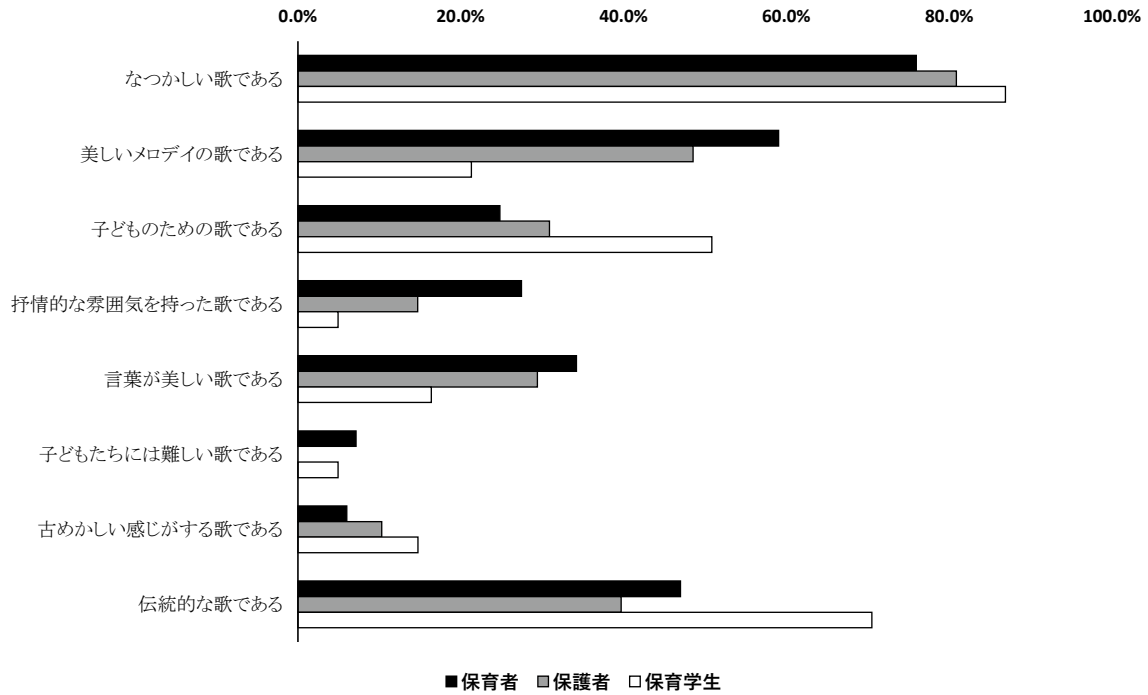


図7 唱歌・童謡に対するイメージ (3者)

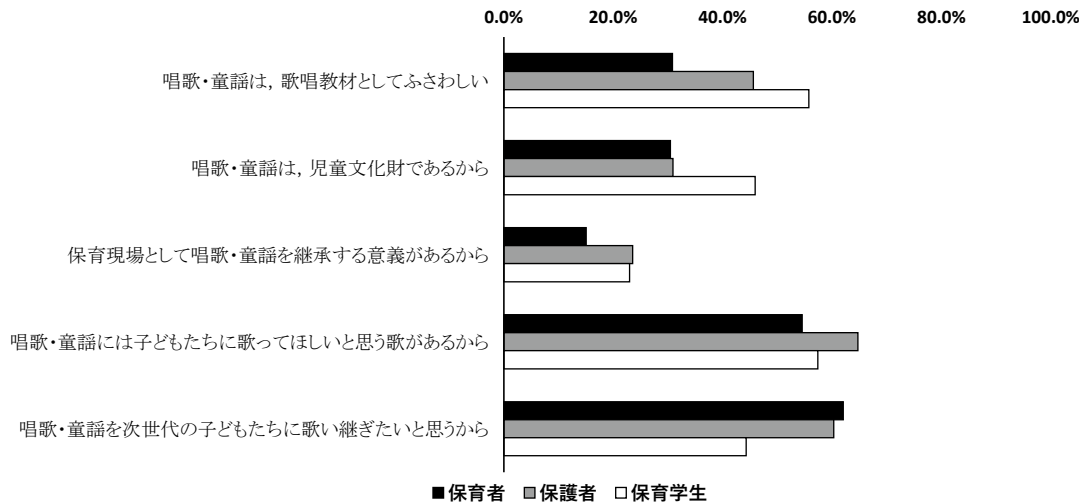


図8 継承することに賛成の理由 (3者)

童謡は歌唱教材としてふさわしい」の項目であり、 χ^2 検定の結果、3者間の人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2) = 15.643, p < .01$)。さらに、「唱歌・童謡は児童文化財であるから」の項目においても保育学生の回答の割合が保育者、保護者よりも高く、 χ^2 検定の結果、3者間の人数の偏りは有意であった ($\chi^2(2) = 5.518, .05 < p < .10$)。「保育現場として継承する意義があるから」の回答比率には差は認められなかった。

4. 考察

今回の質問紙調査の結果、保育者として「唱歌」「童謡」を歌唱教材として用いること、これらの教材曲を子どもたちに継承したいという保育学生の肯定的な意思が示された。1年次前期の授業では、「唱歌」「童謡」についての理論的学習に消極的な姿勢が見られたが、2年次では「唱歌」「童謡」への歌

唱歌教材としての必要性を認め、子どもたちに継承していききたいという明確な意識へと変わったことがうかがえる。

この変化は、本学の保育学生たちが保育者養成課程のカリキュラムにおいて、「保育原理」「保育内容（表現）」「保育内容（言葉）」「保育内容（環境）」等の科目を学びながら、幼児教育としての学びを総合的かつ包括的に深化させたことと密接に関わっている。言い換えれば、関連する学習を重ねるごとに、子どもたちに歌わせるべき「唱歌」「童謡」の文化的価値を認識し、同教材曲を積極的に捉える姿勢へと成長したことを意味している。これらの成長の様相は、質問紙調査の中の「唱歌・童謡を継承することに対する積極的な意思」として確認することができた^{注4)}。あわせて、保育者および保護者たちは「唱歌」「童謡」を「なつかしい」「美しい」といった情緒的なイメージのみで捉えているのに対し、保育学生は「子どものための歌」「伝統的な歌」と理論的に捉えていることもわかった。このことも保育学生の学修成果として考えられる。

このように、「唱歌」「童謡」について学習した保育学生はこれらの教材曲を保育現場で唱歌教材として用いること、そして「唱歌」「童謡」を保育現場で次世代の子どもたちに継承することの重要性を十分に理解したと解釈することができる。また、保育者および保護者を対象とした質問紙調査の結果からも「唱歌」「童謡」を継承するべきであるという意見が示された。つまり保育学生、保育者および保護者の3者は一致して「唱歌」「童謡」を歌い継いでいくべきであると決意していることが改めて確認された。

とは言え、新たな課題も浮上してきた。それは、「唱歌」あるいは「童謡」といったカテゴリーに位置づけられる楽曲が、同時に、「季節の歌」や「行事の歌」といった名称でも分類され、愛唱されているという保育現場の実情である。

保育現場における唱歌教材は、「季節の歌」や「行事の歌」という名称が日常的かつ汎用的に扱われて

おり、この実態は白石（1989）⁶⁾、太田他（2018）⁷⁾、水野（2015）⁸⁾および羽根田（2020）⁹⁾によって報告されている。そして、これら季節および行事に関連して歌われる教材には多くの、いわゆる「唱歌」「童謡」が含まれている。確かに、「唱歌」「童謡」には自然、風景および生活、風習を題材にした歌が多く、今回の質問紙調査用紙配布時に参考例として示した「ちょうちょ」「お正月」「虫の声」「かたつむり」「もみじ」「どんぐりころころ」などもまさしく季節もしくは行事に関連している。したがって、これらの唱歌教材曲が季節の歌もしくは行事の歌として保育現場においては常態化・固定化し、実際には「唱歌」「童謡」として認識されていないとしても、仕方のないことかもしれない。

しかし、今一度繰り返すが、保育現場で「唱歌」「童謡」を継承するのであれば、単なる「季節の歌」「行事の歌」としての認識ではなく、「唱歌」「童謡」として位置づけ、その上で明確な意思を持って教授・学習されなければならないと考える。つまり、「唱歌」「童謡」の誕生した歴史のおよび音楽的背景や作者の意図など、これらの教材曲の持つ意味が保育者によって理解され、意識的に教材選択がなされなければならない。

「唱歌」および「童謡」を継承することの重要性については、多くの研究者によって唱えられている。水野（2015）¹⁰⁾は、「唱歌」「童謡」を伝承文芸として捉え、日本文化の一部と述べている。平澤（2018）¹¹⁾は、これらの教材は文化所産であり、保育現場で歌われなければ、伝統文化の消失であると指摘している。さらに、陸路（2022）¹²⁾は、同教材曲が保育において文化的価値としての役割を持っていると述べている。これらは世界でも例を見ない^{注5)}子どもの歌であり、明らかに文化的価値および音楽的価値のある楽曲として後世に伝えなければならない。

もちろん、わが国における子どもの歌は、「唱歌」「童謡」のみではないし、「何を継承するのか」という継承の意義については改めて再検討する必要があるだろう。単に「文化」「伝統」という言葉では

なく、「唱歌」「童謡」の何を伝えるのか、何の精神を伝えるのか、さらには歌い継ぐ理由を示さなければならぬ。子どもたちによって愛唱される歌がたくさんある中で、「唱歌」「童謡」のカテゴリーをどのように活かすことができるのか、音楽的な視点からも追究する余地がある。感情的になるのではなく、継承しなければならない確固たる要因を打ち出していかなければならないであろう。

本研究で示したように、シラバスを改訂した「音楽2」では、「唱歌」「童謡」の誕生から歴史の変遷について保育学生と概観し、歌唱表現活動を行ってきた。先述したように、これらの教材曲を理論的に学習した保育学生は、保育者としてこれら教材曲を継承したいという意識を持つことが確認された。こうした意識は、保育学生のこれらの教材曲を用いる歌唱表現活動をより豊かに向上させるものであると確信している。実際に2年次の保育学生のこれらの歌唱教材を用いた表現活動には、保育のねらいを明確に設定して、さまざまな表現活動として展開できるようになった姿が見られるようになった^{注6)}。さらには、ピアノ学習経験の乏しかった保育学生にもピアノ伴奏が自信を持った表現活動となったことが確認された。保育学生が子どもの歌の中でも「唱歌」「童謡」を学んだことで、歌の持つ意義や歌唱教材の重要性、さらには保育者としての表現について理解を深めたいのではないかと考えている。

本研究は、「継承」という側面から「唱歌」「童謡」についてアプローチした。今後は、これら教材を歌い継ぐ理由について明らかにしながら、保育教材としての選別方法、表現活動の展開方法についても提案していきたい。

謝辞

本調査をするにあたり、新型コロナウイルス感染状況が厳しい中にもかかわらず、鳥取県内の保育現場の先生方、保護者のみなさま、そして保育学生のみなさまにご協力いただきました。記して感謝申し

あげます。

注

- 1) 「音楽2」では、ピアノ演奏技術習得の学習内容も含んでいる。
- 2) 小学唱歌集として「ちょうちょ」「みわたせば(むすんでひらいて)」, 言文一致唱歌として「キンタロウ」「うさぎとかめ」「はなさか爺」「一寸法師」「だいこくさま」「お正月」, 文部省唱歌として「春が来た」「虫の声」「われは海の子」「桃太郎」「かたつむり」「日の丸の旗」「雪」「もみじ」「茶摘み」「春の小川」「ふるさと」「朧月夜」を示した。
- 3) 「かなりや」「赤い鳥小鳥」「夕焼小焼」「てるてる坊主」「どんぐりころころ」「証城寺の狸囃子」「兎のダンス」「赤い靴」「揺りかごのうた」「靴が鳴る」「七つの子」「春よ来い」「しゃぼんだま」「アメフリ」「背くらべ」「赤蜻蛉」を示した。
- 4) 「歌い継がれた歌」「長い間受け継がれてきたことは、童謡にしかない魅力がある」「童謡はあたたかいイメージがある」「無くなってほしくない」「童謡は子どもたちにとって想像性が豊かになり、子どもたちの発達に大きく影響する」「唱歌・童謡を歌っている子どもたちはいきいきとしている」「童謡ならではのかわいらしい曲もたくさんあり、活用したい教材である」「唱歌・童謡は時代が変わっても受け継いでいかれる歌である」「子どもたちにたくさんふれさせてあげたい」「歌うことが楽しかった」「歌詞の中に物語がある」等の意見が見られた。
- 5) 金田一春彦は、著書『童謡・唱歌の世界』(1978)の中で、唱歌・童謡について日本特有の文化現象であるとも述べている。
- 6) 2年次開講の「保育内容(表現)」では、季節および行事を扱った歌唱教材の表現活動を学習内容としている。

引用・参考文献

- 1) 太田央子・山中文・渡邊康「保育活動における童謡・唱歌の機能」, 『相山女学園大学教育学部紀要』第11号(2018), pp. 97-116.
- 2) 平澤節子「童謡・唱歌を歌い継ぐ音楽教育のあり方について—幼児期から高等教育までの展望—」, 『児童文化研究所所報』第40巻(2018), pp. 61-74.
- 3) 羽根田真弓「唱歌・童謡の今日的様相と課題—保育者を対象とした質問紙調査をもとに—」, 『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』第80号(2020), pp. 27-33.
- 4) 上笙一郎『日本童謡事典』, 東京堂出版, 2005, p. 260.
- 5) 前掲書4), p. 260.
- 6) 白石昌子「幼児の歌唱教材選択に関する一視点」, 『福島大学教育学部論集 教育・心理部門』第46号(1989), pp. 17-32.
- 7) 前掲書1).
- 8) 水野智美(2015): 幼稚園・保育所・家庭において幼児が親しんでいる音楽の分析—童謡・唱歌離れ現象をめぐって—, <https://sound-zaidan.workarea.jp/27R01M.pdf> (2022年9月10日アクセス).
- 9) 前掲書3).
- 10) 前掲書8).
- 11) 前掲書2).
- 12) 陸路和佳「保育現場における童謡・唱歌が持つ今日的役割—文化的価値観との関連において—」, 『鶴見大学紀要』第59号第3部(2022), pp. 45-50.